

## 令和4年度 第1回岡山県子ども読書活動推進会議（議事要旨）

令和5年1月27日（金）15:00～17:00

Z o o mによるオンライン会議

出席者 相賀委員、大園委員、徳山委員、廣瀬委員、藤森委員、松本委員、  
三宅委員、湯澤委員

### 1 開 会

### 2 会長の選出（湯澤会長）

### 3 議事運営等に関する申し合わせ

### 4 議 事

- 大学の授業は今年度は対面での授業が続いている。個人はコロナの関係で欠席があったりするが、大枠として再び対面の時代に戻りつつある。  
学生の中では、まだマスクを外すことはないが、密になる話し合い等の場に臆してしまっている状況があり、ちょうど社会が移り変わっている状況にある。  
人と関わることができなかつたり、図書館に行くことができなかつた状況から再びコロナ以前の状況に戻りつつあるため、良きものをまた再び引き継ぎながら対面でなければできないような具体的な読書支援の在り方について考えていけたらいいと思っている。

#### （1）岡山県における子ども読書活動推進事業について

- 「もっとおもしろe読書事典」、「もっとおもしろ読書事典図書セット」については、司書の先生がどれだけの時間、学校に滞在しているのかに活用が左右されるかもしれない。
- 司書が常駐する図書館だと利用率が上がるかとか、なかなか実績がないところは常駐していないとか因果関係があるなら教えてほしい。
- 今年度で事業が終了した後、9セットはどのようになるのか。  
県立図書館にも図書の貸出しセットがあると思うが、「もっとおもしろ読書辞典図書セット」を県立図書館で持ってもらい、図書館の事業として何かやってもらったりはできるのか。
- 県立図書館では、「学校支援用セット」というものがあり、テーマを加味して貸し出しをしている。この「おもしろ読書事典」に関してのセットはまだないと思うが、今後どういうふうに活用するかということで、県の方でというのであれば検討の一つになるかとは思いますが、まだ未定。

- 貸出しのルートがあるところで上手く活用してもらえるとよい。
- 今は、岡山市が入っていないので、県立図書館が管理してくれるのなら、岡山市の中学校が利用できるようになる。県立図書館としては大変だとは思いますが、幅広く利用できるようなになったらいいと思う。
- おもしろe 読書事典については、利用している学校では、司書が声掛けを行っている。大人の声掛けが大切だと思う。
- ID の管理について、配付はされているが活用できなかった現状があるとしたら、ID の管理と ID 配付後の活用方法の両方を考えていく必要がある。
- 1 人 1 台端末が普及し、電子図書館事業については生徒にとってはアクセスしやすいと思っていたが、プラスアルファの作業や管理が非常に難しい課題であると聞いている。
- 市町村の図書館でこのような事業を引き継いでもらう際に、子供たちがどのようにアクセスするかということ、どのように利用を促していくかは引き継ぎの課題である。

## **(2) 令和 4 年度子供の読書環境に関する実態調査の結果について**

- 子供たちと親との関わりの中で、どういったことを家で一緒にするのが読書の好き嫌いに差がでてくるとある。
- 朝読書を学校でしているか、いないかによって数値の関連性があると思う。  
中学生は、平日は学校で朝読書をしていて、土・日は部活やスマホに時間を使うため、その差が顕著になった可能性が考えられる。  
高校生の不読率が高いのは、学校で朝読書をすることがないからだろう。  
いわゆる朝読書のような、学校読書活動は、読書の好き・嫌いの傾向や読書時間とかそういったものに関連性が出てくるのではないかと思う。
- 高校生に関しては厳しい調査結果があり、これに対し、日々我々も現場でどうしたらいいかと考え、試行錯誤している。  
高校生の生活は、勉強や部活、進路に関する補習も多く忙しい。実際、朝読書をするとしても、朝練があったり、通学範囲が県下の広範囲にわたっていたりして、なかなか時間の確保が難しい。授業の方も忙しく、学校の生活時間の中で読書をする時間を生み出すことがそもそも難しい。
- 図書館で何かできることはないかと考え、読書を話題にできるよう、例えば図書委員会や授業などを通じて情報発信をしている。その結果、本校ではこの 1 月までに

不読率が減少してきており、生徒の間で読書習慣が広がってきていると思う。  
コロナ禍で学級閉鎖があったり、登校生徒数にも変動があったりと、昨年度と単純に比較することは難しいが、改善しているところもあるため、面白い企画や運営等の工夫により、本の種まきをしていけたらと思う。

- 高校は先生方も忙しく、ご自身が本を読む時間もないため、例えば授業の時間や休み時間に本について生徒と雑談するということがしづらくなってきている。大人も子供もゆとりある生活を送り、しっかりと本に向き合える時間の確保が必要。  
現状では、活字を読むとことに慣れていないと、読書に喜びを感じられなくなってきているところに難しさを感じている。
- 読書の意識の調査について、小・中学生、高校生と共通して、自分の予想している以上に「好き・どちらかと好きか」というと「好き」の割合が高いと感じた。  
できるだけ幼少期からたくさん本に出会えるように保護者の方にしっかり関わり、読んでもらう経験は大切であり、読書について保護者にどのように意識を持ってもらうかというところをしっかりと考えていかなければならない。
- 子供の読書の好き嫌いに見た体験活動というのは親御さんにも訴える数字が沢山並んでいるため、この結果をいかにアウトプットしていくかが今後の課題になってくるのではないかと思う。
- 地域の図書館で本を手に入れる割合が低いのは気になる。  
コロナ禍で、図書館への来館者が減っていると実感する。  
それぞれの家庭によって読書への関わり方は様々だが、子供の読書と大人の読書も合わせて考えなければならない。  
子供のことだけではなく、身近にいる大人達もしっかりと読書に親しむ環境作りが必要。
- 図書館司書との交流については、小学校では頻繁にあるが、中学校になると激減する。  
どのように小・中学生へアプローチして図書館を利用してもらうかを考えなければならない。  
地域の図書館、公共図書館の役割は重要と認識している。  
今回の調査結果を活用して、アプローチの仕方をいろいろと検討したい。
- 小・中学生、高校生に共通して、公共図書館の利用率が低いのはかなり残念な結果だ。しかし、学校の図書室を使うという率が高いと書いてあり、地域の図書館から、学校図書館を支援していくという形で小・中学生にアプローチできたらいい。
- 複層的な関わり方が効果的ということが見えてきた。

○中学生の不読率が9.8%と低減されており、全国18.6%と比べても低いし、前年度の県の数値と比べても減っている。「もっとおもしろ読書事典」の貸出しなどの効果があったと思い、嬉しい。

高校生は読む時間を確保することが一番の読書支援になると思う。

テレビやスマホも手に取らない時間が確保できるのは、学校の中だと思うので、沢山本を読んでもらうには、学校での読書の時間を確保していくことが読書支援に繋がる。

○小学生は学年が上がるほど、読み聞かせをしてもらうことで読んだ気になってしまい、自分で読む読書につながらない傾向がある。低学年では、読み聞かせの後、子どもに本を手にとってもらい、“読み聞かせをしてもらって楽しかったように、自分が読んでも楽しい”と感じてもらえるなら、読み聞かせも読書支援の一つに入る。特に小学校の高学年ぐらいでは、読みたい中身と自分が読めるレベルが隔離し、文字が大きくて、例えば幼い本だと読めるけど、それを読んでいる自分が恥ずかしいといった気持ちが出てくる。いかに高学年が恥ずかしくなく、プライドを傷つけることなく読む練習ができるか、そのような支援をしっかりと大人が考えてほしい。例えば昔ばなしの読み比べや絵本を読み比べてみんなで違いを話し合うといった取組みをすると恥ずかしくなく、読む練習ができる。読むことが苦手な子が、いくら一定の分量の本を読めるような訓練を苦痛を感じず重ねていける時間や企画が必要。

○書店やネットでは偏ったものしか手に入れられない。図書館は司書の目できちんと選んでいる。

今は残念ながら、図書館でしか手に入れられない絵本や児童書が沢山ある。

子どもは選書の力が弱いのでそのあたりはしっかりわかっている大人がもっと積極的に支援していくべき。

○学校図書館の限られた本では賄えないところを公共図書館がしっかり連携してバックアップし、貸出し等行うなど、学校図書館を活性化することが公共図書館の活性化にも繋がると思う。

### **(3) 今後の取組の方向性について（具体案について）**

○本校では生徒が書架の間で本を選ぶのに迷ったとき、本を開いたらその本の紹介が手元でわかるようにしている。なるべくビジュアルで目に留まるような図書館作りを目指しているので、目に留まった本を手にとってくれることが多い。

○岡山県内の高校の図書館合同企画で、部活動のキャプテンのおすすめ本を紹介してもらう企画を行った。

最終的には紹介 VTR の形にまとめ、各校で見てもらえる企画となった。  
同世代の生徒の顔が見える形で紹介されると、大人に薦められるよりは生徒の心に刺さるようで、よく手に取られていた。  
読め、読めと生徒に言うことより、読んでみようかという気にさせる雰囲気作りや、言葉の選択がとても大事。

- 読書イコール小説というイメージを持たれているようだが、実は普通の授業や課題研究の中では専門書をたくさん読んでいる。それを読書とは認識していないかもしれないので、調査をするときに問いの設定を少し工夫してみてもいいかもしれない。「本を利用したことがあるか」というように、問いの言葉を変えてみると、もしかしたら高校生の数値が変わってくるかもしれない。
- 部活動のキャプテンや委員会等をリードしている子供たちの話を聞いたり、先輩から子供達が影響を受けるような機会を設けてはどうか。  
できれば中学校での委員会の活発な活動を利用しながら進めれば、読書好きが増えるのではないか。
- 他県では、働き方改革で朝読書の時間をやめた学校があり、学校における読書活動の確保が難しくなっていると感じている部分もある。
- 一斉読書は読書習慣の形成につながることもあるので、ぜひとも学校での読書の時間の確保をお願いしたい。
- “読み聞かせ”ではなく児童書を紹介する取り組みをしたところ、効果があった。児童書は面白くなったらどんどん読み進められるが、そこに到達するまでにくじけることが多い。大人が先導して一部を朗読したり、本の特徴を伝えたり、続きは自分で読みたくなるよう工夫した紹介の仕方をしたところ、本の貸出しがものすごく増えた。
- 夏休みに中学生が小学生に読み聞かせを行うことを企画した。それが動機付けになり、中学生が自分たちで読み聞かせを行う絵本を選ぶために能動的に読むことで、読書の機会になったり、懐かしい思いからまた読書の時間が増えることにもつながった。  
小学生の1年生から6年生まで発達段階に幅があるため、それぞれに合った支援が必要。
- データの活用の仕方も大切。  
体験活動というものが、「読まない」のではなく、「好き・嫌い」に直接に影響することがデータとして出てきている。このデータの見せ方次第で納得感を段々と得ていく方法もある。

具体的な体験活動がどのように繋がっていくか、幼少期においては、なかなか親も見えないところだが、中学校、高校で好き嫌いに繋がっているところをデータとしてうまくアウトプットしていく方法を是非とも検討してほしい。

- 公共図書館が学校図書館を支援する後方支援もまずは、資料の収集が大事で、充実した資料を所蔵しているこそ支援が可能となることから、県立図書館としては、今は正念場だと思っている。

子供に限らず、大人も楽しめる、「図書館に行ってみよう。」と思ってもらえるきっかけ作りについては、県立だけでなく、市町村の図書館と共同企画で行っている。本の見せ方、展示の仕方、行くたびに少し違っていると感じてもらえる見せ方を引き続き、地域の公共図書館として続けて行きたい。

- 子供の読書に関して即効果があるものはなかなかないが、本から離れている子供への関わり、家庭の中で読書とつながりを持ちにくい子供への関わり等、どのような関わり方が効果的か、子供たちの姿を想像しながら具体的な取り組みを考えていけるとよい。